



市営今宮住宅
現在：夜間宿所

西成労働福祉センター
現在：自彊館三徳寮

萩之茶屋小学校

上の写真は、昔の西成労働福祉センターの屋上からのパノラマ写真です。長くセンターにおられた上畑さんが、1969年か70年に撮影されたもの。下の地図は、写真が撮影された当時の地図です。「西入船町」の町名表記の右側に「愛隣綜合センター（工事中）」とあります。尼崎平野線の拡幅工事は工事中のセンター前を東に越えたあたりまで進んでいます。現在の市営萩之茶屋第2住宅と自彊館三徳寮部分にまたがって「西成労働福祉センター」があり、その東隣に「今宮市営住宅」とあります。



「市営今宮住宅」は、東入船町 22 に所在。1929（昭和 4）年建設で 78 戸、中層耐火構造。70 年当時家賃 150～360 円と記録されています（大阪市営住宅一覧。1971 年版には今宮住宅の記載はありません）。昭和初期に建てられた、日東町や下寺町の市営住宅と同じ外

観・構造で、それらの住宅同様、戦災を免れた建物ということです。釜ヶ崎は戦災で丸焼けといっても、全ての建造物が焼失したのではなく、耐火構造の建物などは残ったということの証し。

地図右側、「山王町二丁目」の下に、「市設山王住宅」(山王町 2-60)とあります。これは1946(昭和 21)年に建設されたもので 91 戸。家賃 140~200 円。木造の共同住宅。



左の写真は、昭和 10 年に建てられた聖心セツルメント(愛徳姉妹会)。場所は、海道町 36 番 1。右は、昭和 20 年 3 月 13 日空襲で焼失した聖心セツルメントの焼け跡。現在は、西成警察裏の公園の一部になっています。



戦災復興土地地区画整理事業の完了した街区が桃色囲み、整理前の道と思われるところを、青色で示してみました。図に線が多く、道か補助線かの区別が難しく、あて推量ですから正確ではありません。

焼け跡の写真の場所は特定できますが、北を向いて写したのか南を向いて写したのかはつきりしません。

西向きなら背景に南海線が、東なら西成署が写っているはずなのですが。

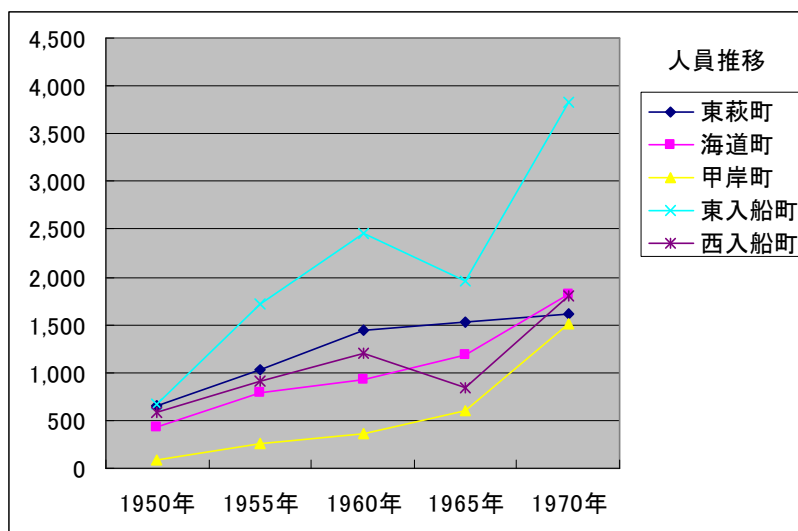
整理計画では、萩之茶屋工区内に寺院教会地は 295 坪ありましたが、整理後は 206.5 坪と、88.5 坪減少見込みとなっていました。田-1 坪、畑-3,178 坪、原野 737 坪が

あったようですが（実際に田畑であったのか、地目上の分類だけで実態は家屋が建っていたのかは不明）、整理後にはこれらは0となる計画でした。

終了までに561戸が移転しました。整理の結果、道路は整理前の25,455㎡（工区面積の8.9%）が、81,813㎡（工区面積の28.5%）に増加し、宅地は工区面積の91.1%であったものが67.8%へと減少。公園はゼロから、工区面積の3.6%となっています。

萩之茶屋工区移転戸数推移

1946～58年	1959～63年	1964～69年	1970～75年	1976～80年	1981～88年	1989年以降	
21～33年度	34～38年度	39～44年度	45～50年度	51～55年度	56～63年度	平成元年以降	合計
133戸	101戸	93戸	146戸	22戸	62戸	4戸	561戸
銀座通り拡張に伴うものが中心か？		センター周辺・東四条が中心か？		萩之茶屋3丁目南海本線東側が中心か？			



甲岸町はもともとお寺や学校があり、居住面積が多くなかったのと戦災の被害が大きかった影響で、人口の増加が他地区よりも遅かったと思われる。

東西入船町で1965年に落ち込みがありますが、この時期はちょうど池田内閣時代（1960年7月～1964年11月）

で、公共事業の増大・全国総合開発計画による地域振興策などの影響により、移動性の高い労働者の各地工事現場への移動があったのではなかろうかと考えられます。昭和40年は不況の年ですが、東西入船以外には大きな落ち込みは見られず、「不況—仕事の減少—一時的な帰省」のあらわれとも考えられます。区画整理による立ち退きの影響も考えられますが、確認はできていません。1965年以降は1970年の万博準備で人集めが本格化します。

1952（昭和27）年に釜ヶ崎に来た人によれば、銀座通りは今の半分くらいの道幅しかなく、バラックが建ち並んでいたといいます。銀座通りの入り口付近には誰が据えたか判らない拡声器から歌謡曲が流されていたそうです。昭和29年から2～3年間は確実に聞いた記憶があると。昭和33年から35年の3年間、まだただの空き地であった現三角公園で、リクノがしきった盆踊りがありました。「盆踊りには、呉越同舟、社会党N国会議員寄贈の提灯が、手配師、自民党のそれと肩をならべる。（仲村祥一・思想の科学・1961年）」盛大なものだったようです。それまで盆踊りといえば江州音頭でしたが、その頃から鉄砲光三郎の河内音頭鉄砲節が流行りだし、目新しさと軽快さに、踊る人ばかりでなく周辺に座って聞き入る人も多く、黒山の人だかりだったといいます。

今宮住宅の北や東はまだ「ドヤ」もちらほらの状態で、西側には空き地があり、今のセンターに珍々堂の露店のオカキ干し場のほか南海電車高架周辺のバラックや一戸建ての家

が建て込んでいたそうです。

昭和26年発行の「西成区政誌」所収の地図には、公園予定地が4箇所記されており、現センターの南部分は公園予定地であったことがわかります。

第一次釜ヶ崎暴動によって、区画整理事業の当初計画も変更されていることがわかります。

1960（昭和35）年朝日新聞に、柴田俊治記者による「大阪のどん底—“釜ヶ崎”に住んでみて」という連



載記事があります。そのリード文に、

『「岩戸景気」であり、「繁栄の年」だという。一略一生活保護を受けているか、あるいは受けなければやっていけない困窮家庭は全国で169万世帯にのぼるという（34年版国民生活白書）。全世帯の8.1%が、食うや食わず、ツナ渡りのようなその日暮らしをしているのである。いつ首を切られるかわからない臨時工、下請工、大資本や親会社に押される零細企業、家内労働、不況のヤマ（補注：炭坑）、土地のない農民、不漁にあえぐ漁民、厳しい自

然に打ちひしがれる辺地の人々、そして仕事を求めて、日々都会へ流れ込む反失業者たち……ぶあつい層の底辺が日本にどっしり腰をおろしている。そこには明るい光もさしまず、人間らしい生活もない。あるものは貧乏、失業、病気、不幸、犯罪、暴力……暗い、すべてが暗い。今の繁栄がこうした基盤の上になりたっているとすれば、私たちはこの“どん底”に目をおおってはならないだろう。記者は歴史的に名のたかい南大阪のスラム「釜ヶ崎」に二十日ばかり暮らした。貧しい人びととともに私のみたのは、好奇な生活ではなかった。やっぱり現代の政治の手のとどかなさが、社会のゆがみが、人の世の無情が、この小さな都市の谷間に一挙に集中している姿だった。ありのままに報告しよう——。』とあります。



連載 1 回目に掲載された略地図から見ると、「ドヤ街」の中心が海道町であると想像されます。柴田記者により、当時の街の様子を見ることにします。

『南海電車の萩の茶屋駅をすぎるとガードのすぐ東側。市電の霞町から行けば釜ヶ崎の“立ちんぼ通り”を南へ、西成警察署の前をちょっと通り過ぎると南海天王寺線の踏切の西側に小さな公園がある。この公園と南海本線のガードの間、ここに一“職安横丁”はある。

まん中に通称西成職安、お役所流に言えば「大阪府阿倍野公共職業安定所西成労働出張所」。一表門の前がメインストリート。そのまわり、勝手気ままに建ったドヤ、日払いアパート。くねくね曲がってはくつつく路地に群がるめし屋、古物屋、競輪のノミ屋。

ドヤの泊まり賃がまず 50 円。30 円しか残らなかったらどうする？「ドヤ銭にもならん、バクダンや」と飲むのである。屋台の前にごろごろ寝転がりだした。公園では拾い屋が手押し車の中にはい込んで眠る。この寒夜にアオカン（野宿）は酔いつぶれでもしないとムリだ。ふらふらと地下鉄の動物園前へいくと、シャッターが閉まって、その前のわずかな軒端ももう満員である。

午前 6 時 45 分、西成職安の紹介が始まる。空はまだ暗い。ここに登録している日雇労働者は、男 4,300 人、女 700 人。「直行」といって直接きまった工場や作業場に行くのもあって、毎朝集まるのはざっと 4,000 人。場ちがいに大きな照明灯が、群がる労働者たちの防寒帽を浮かび上がらせる。—

“民間”（失業対策事業とは別に工場や作業場から求める日雇）の紹介場は人間のセリ市だ。「××建設、500 円」係員が壇上で求人先と賃金を読みあげる。その下につめかけた人たちは、証券取引所の場立ち人みたいに、ホイ、ホイと登録カードを差し上げる。係員は手近なところから、ひょい、ひょいとカードをつまむ。これでその日の仕事が決まるのである。「つぎ！○○運輸、450 円」つまみ上げられなかったら、最後に、仕事が見つかる賃金は安くて、希望者の少ない“ケタ落ち”の仕事にでも行かねばならない。—

Sさんは“出戻り”である。二年前、知人の口ききでアンコの足をすっぱり洗って石ケン工場へ入った。月給 7,500 円。収入はそう変わらないが、夢に見た“定職”である。半年働いた。昇給はない。将来の見込みもない。失対なら曲がりなりに健康保険も失業保険もある。仕事はラクだ。これなら日雇いの方がいいじゃないか……また舞い戻ってきた。こうした“出戻り”は多い。就職の話はあるのだが月給をもらうまでのそのひと月が暮らせないので、と力弱く笑った人がいた。



一泊 30 円一板の間に湿った毛布が三枚。並んでゴロ寝する。

50 円一同じ板間のゴロ寝だが、薄っぺらいワラのマットがつく。

60 円から 70 円一カイクだなのような二段式の仕切り。せんべいフトンが上下一枚ずつ。

80 円から 100 円一二人のあい部屋。フutonは上下各一枚。交代でフロに入れる。

200 円一一室貸し切り。フトンが掛

け二枚になる。

住む人も違う。“職安横丁”の路地、50 円から 70 円のドヤは、まず職安の日雇労働者、拾い屋、手伝い、行商人、不安定だが何がしかの職を持つ“勤労者”である。

西成署の周辺から釜ヶ崎の中心部へかけて 100 円—200 円のドヤ。なにをしているのか分からぬのが多い。売春婦とヒモ、男ショウ、ヤミの労務手配師、押し売り、マージャン屋のメンバー、ヤミタクの運転手……ひる間ごろごろしている若もの、とにかく目つきが鋭い。



一泊 50 円、安いように思う。だがひと月にすると 1,500 円、100 円なら 3,000 円。世帯もちには日払いアパートというのがある。これが三畳で日に 100 円から 150 円、月にすると 3,000 円から 4,500 円、公団住宅なみの家賃になる。

この地区の売春婦は推定 500 人。旧飛田遊郭の周辺一帯は暴力団につながる組織売春。釜ヶ崎のなかにはヒモつき、または子持ちの生活のための売春。この女たちのための機関

としては、大阪市の西成簡易婦人相談所に相談員が二人いるきり。一

この窓口を通るケースをじっとみると、おぼろげながら二つの柱が浮かんでくる。

一つはやっぱり未解放部落、もう一つは地方の小さな紡績・織物工場。

中学を出ても大きな会社へ就職できない部落の子は、食堂やパチンコ屋を転々とする……。紡績業界では、十大紡などはどうしても成績やからだのいい子を選ぶので、地方の零細工場がとり残された貧しい子を集める。安い賃金、深夜労働。いやになって食堂、パチンコ屋……。二つの柱は合流する。こうして売春予備軍がプールされる。

フロしき包み一つ持って大阪駅や天王寺公園へ。ハンコで押したようなコースがケース簿に並んでいる。もうじき春だが、春さきには天王寺公園へ毎日 2~3 人はくるのだから、警察に保護されるより暴力団のアミにかかる方が早い。

警察の調書には「都会にあこがれて…」なぜ彼女たちは都会にあこがれるようになったのだろうか。“堤防の破れ”はこの辺にあるようだ。



職安横丁の路地あたり、ゴミ箱を横にしてベッタンをやる子、チャンバラでかけまわる子。父が日雇、母が旅館の掃除婦という形が多い。

生活力という意味では、この子らはたくましい。グループでずっと西の工場地帯へいく。ヘイをのり越えてクズ鉄を拾い、ヨセヤへ持っていく。難波の大阪球場へもぐり込む。試合のすんだあとのス

タンドをひと回りすると、万年筆やサイフが落ちている。女の子ならホルモン焼き屋の手伝いをしたり、屋台のコップを洗ったり。夜の女のシケ張り（見張り）をして、20 円ほどもらう子もいる。

おとどしの秋、職安横丁の近くで民生委員をする村上さんという薬局店主が、学校へいかない子を一人々々あたってみた。ほとんど学籍がなかった。移動証明を持たずに流れてきたので、子供が学齢になっても就学通知がこないのである。村上さんは教育委員会と区役所をかけずり回り、去年の春、やっこのうち 30 人を居住証明で今宮小学校へ入れた。婦人会や有力者の寄付で学用品も買ってもらい、壮行会までした。ところが PTA から強い反対がもち上がった。「そんなガラの悪い子を次々と集団で入れてもらっては…」いまの学校は PTA に弱い。校長さんも悩んだ末に、集団では困るが、親が一人々々手続きを取って個人でなら、ということになった。今度は親が区役所など七面倒なところへは行きたがらない。子どもたちは村上さんのところへ「オッチャンまだか？」と毎日尋ねてきていたが、もう来なくなった。



ドヤ暮らしには時計がいらぬ。南海電車の一番電車がガードを響かせて走り、ドヤの小さな窓が白むと、起きる。「内地米おかゆ、15 円」のバラックに飛びこむ。ちぢかむ手で抱くドンブリのぬくさ。塩をぶ

っかけフーフーすすって霞町の方へ向かうと、そのドヤ、あっちの路地から寒そうに背をかがめポケットに手をつ込んだ男たちが出てくる。

阪堺線南霞町駅前の十字路を中心に、地下鉄動物園前の上り口、関西線のガード下、ほの暗い夜明けの寒気のなかにつっ立っている男たちをあわせると 500 人になるうか。こうして、その日の仕事にだれかが連れにきてくれるのを待つ。連れにきてくれるまで、いつまでも立っているのだから“立ちんぼ”という。

近鉄百貨店と市大病院の背に、冬のにぶい太陽がのぼるころ、威勢いい男たちが出てくる。ハッピー、幅広ズボンのスソをつめて軽快そうなゴム裏タビ。立ちんぼたちを見回し、気に入ったものをアゴでしゃくる。しゃくられた立ちんぼたちはホッとした顔つきで、ゴム裏タビのあとについてゆく。“手配師”である。――

小正月で仕事が少なくて、立っているものの三分の一はアブレてしまう。

オート三輪やトラックでのりつける“求人”がある。われ勝ちに荷台にとび乗るのだが、注文の人数より多すぎて、手配師に肩をつつかれ降ろされてしまう。こんな臨時の求人者は、目の前で手配師に 100 円札をにぎらせる。この分はオート三輪にのった立ちんぼたちの賃金から当然さし引かれるのだ。

四日目に、頼んである手配師に紹介してもらい、やっと仕事にありついた。城東線ぞいの工事現場でコンクリートをこね、500 円もらった。昼の休みに話した実直そうな中年の男「あんた四日目なら早い。わしは手配師にメン（顔）を通じて仕事にありつくまで半月立ってた。京都から夫婦で出てきて天王寺公園でアオカン（野宿）。はじめて仕事にいった日が 380 円やった。そのカネにぎって走って帰って、公園で待っている女房に“オイ、仕事あったぞ。宿屋へ行ける！”半月ぶりのフツンの味、なんともいえなかった・・・」

それから 5 年、立ちんぼ生活を続けているのだそうだ。

あとで聞くと、伊勢湾台風の復旧工事にはここからうんと行きたらしい。立ちんぼの数の減り方からみて千人は下らぬだろうという。あるめし屋でも、常連の立ちんぼの半分が顔を見せなくなったというから、誇張ではなさそうだ。政府の炭鉱離職者対策がどうのこうのと、いまだにぐずぐずいつている間に、社会の裏ではさっさと労働力が動いている。



アベノ近鉄百貨店前から西へのびる舗装道路。南海本線が高架でこの道をまたぐ。ここで目をガードの真下に落とすとコンクリートの側壁にへばりつくように並んだ小屋、小屋……。犬小屋をやや大きくしたというか、牛小屋を半分に割ったというか、ひょこゆがんだ老朽バラックが折り重なるように連なっている。ガードの脚と脚のとの中には、小屋の上に小屋をのつけた二階建てもある。

ここ西成区西入船町、東四条町の密集バラック地域には約 300 軒の小屋、2,000 人近い人たちが暮らしている一。(注：左写真は場所不明。連載記事につけられた場所と同じか？ あるいは関西線の北、浪速区側かも知れない。)

日雇、立ちんぼ、拾い屋、モク拾い、クツみがき、菓子屋、ワンタン屋……。

おかゆ、ぞうすい、イモ……戦争中の食生活が、ここではまだつづいている。

窓がない。あっても小屋がくっつきあっているので昼でも電灯をつけねばならない。なかはず三畳。たまに四畳半のがある。三畳といっても衣類を入れる小箱、ナベ、カマ、食器類などを置くと二畳しか残らない。ここに平均 4~5 人、最高 7 人の家族が住んでいるのである。

水道が 30 軒か 40 軒にひとつしかない。夕飯前は戦争だ。

これらの小屋は、ほとんどが不法建築である。市の道路予定地などへ勝手に建てたものだ。それではここに住んでいる人たちはみんな不法者か？ 半分以上はレッキとした借家人なのである。家賃は日払い、三畳で 100 円から 120 円が相場。月にすると 3,000 円から 3,600 円。窓ひとつなし、電灯が二軒にひとつ、ベニヤ板の仕切りで隣の声まる聞こえちゅう小屋が 3,600 円。

借家人の他は持ち家だが、建てた人から買ったのが多い。一軒が 3 万円とか 4 万円という。ただの市有地に、古材木とトタン板の寄せ集め小屋をたてて、貧しい人たちから住宅公団でも目をむく家賃をとっている家主。この一帯から浪速区の南部にかけて、小屋、アパートの持ち家三百余り、一日に家賃だけでも 5~6 万円ははいるだろうといわれる“貧乏町の大尽”が何人かいる。

ジェーン台風の時だった。他の町には避難命令が伝達されたのに、ここへは来なかった。区役所はここを人間の住んでいる町とは認めていなかったのか。住民たちは怒った。そして町内会の組織をつくった。いまは番地ごとに（ひとつの番地に 30~40 世帯ある）互助会とか宝会とかの町内会がある。

さきの伊勢湾台風のときには、西入船町三番地の互助会で、1,620 円の見舞金が集まった。家をなくしたときの悲惨さを身にしみて知っている人たちが、5 円、10 円と持ちよったの



である。

子どもは町内会で学校へ通わせるように世話をし、不就学児を出さない努力を積んでいる。ところが、いまガード下はひとときわ暗い気分にも包まれている。

就職できない。学科試験は通ったのに、面接で落ちる。会社は理由をいわないが、親たちは家庭調査でこの住所がわかればダメ

なのだと信じている。げんに近くの有名な工場でも、この町の子は一人も採用されたことがないという。「あそこの子もあかん」不合格のニュースが次々つたわるたびに、卒業期をまえにした親たちはいらいらしだした。

ガード下には空がない。空がないばかりか、家賃に締め上げられ、就職は断われ、八方ふさがりだ。』(注：写真に見える張り紙に、西成区選出府会議員末松泉の名が見える。従って、西入船町の写真か?)

柴田記者の連載記事の年の 8 月に東京山谷で、翌年同時期に釜ヶ崎で、第一次暴動が起こっています。

第 1 次 (1961 年 8 月 1 日から 5 日間)

昭和 36 年 8 月 1 日、日雇労働者 (老人) がタクシーにはねられた交通事故をきっかけにして付近の労働者が集り、救急車の処理の遅れから、「見殺しにした」などと騒ぎだし、次第に暴徒化した群衆が、5 日間にわたり、派出所、商店、通行車両、西成警察署などを襲撃して、放火、投石、略奪等の不法行為を繰り返した。これが最初の釜ヶ崎暴動であり、死者 1 人を出したほか、警察官の負傷者 771 人、一般人の負傷者 163 人、検挙者 194 人、動員警察官 10 万 5000 人という戦後最大の暴動事件に発展した。

事件そのもののことはともかく、昭和 36 年大阪府商工労働常任委員会会議録 (9 月例会) によって、なにが問題とされていたかを見ることにしましょう。

『○労働部長 (寒川 喜一君)

ご承知のように、**暴力手配師の取り締まり**をあの事件発生を機会に警察がおやりになる、かようなことで、現在組の首謀者はおおむね検挙され、一部公判等が行われておりますが、**そういうようなことで取り締まりをすると労働者は混乱をしてしまう、労働者の就職確保**というような問題が**非常に困難**になってくる、でありますので、われわれとしては、これを機会に、できますならば近代的な労使関係の確立をやりたいというようなことで、拙速ではございましたがああいう形をとりましたのは、職業紹介というような形になりますと、ご承知のように現在の職業安定法で国の機関で行なければならない、かようなことになっております。

現行法上許されております問題は、事業主が直接労働者を募集される場合、これはむろん通勤距離範囲内という制限はございますが、**該場所の労働者は、おおむね通勤距離内の就労実態でございますので、そういう直接事業主が募集されるお仕事を援助していく、こういう形でいたしますことが、最もやり方としてはスムーズであり、当面間に合うのじやないか**というようなことで、**西成分室を設置いたしたわけ**でございます、将来の問題と



いたしましては、なお問題が残っておりますと思います。

従つて、**あぶれたらどうするか**というような問題もいろいろ議論になりますが、私の率直な見解を申し上げるならば、軌道に乗ります人は、なにも職業紹介を受けられなくとも、**職業安定所に日雇失業保険関係の手続き**をしていただく、このためにはたとえば**住民登録**というような問題が必要になつてくるわけです。その事務

をできるだけ簡素化してやつていくというような形がとれますならば、あぶれた日には失業保険をもらう。これの**手続等**については、目下労働省と現在やつておりますことを何とかもう少し簡素にしてやれる方法がないかというようなことを交渉いたしておりますので、近く何とか結論が出るんじゃないか。

同時に日雇いの諸君の**健康保険の問題**も、そういう問題が片づきますと、問題がある程度だんだんと軌道に乗つていくんじゃないか。

さようなことをいたしましても、ご承知のように行政の立場でやりますと、最後にその網の目から残る人が私はできると思います。

○労働部長（寒川 喜一君）

なお若干余談になりますが、例の釜ヶ崎地区で働いていらつしやる方で**集団的な形で就労**しておりますのは、**港湾労働方面**でございます。その他の面につきましては、それぞれの現場の異なつた大阪府下の地区に散在して働いておる。さようなことから、分散対策ともならみあわせて、国におきまして今回予備費で二百二十人分の宿泊設備を港頭地区に作つていただくというような見通しがほぼ確定を見ております。

○酒井 朋三君

そこで分室をお作りになつて対策を講じていただいておりますので、大へんありがたく存じております。しかしこの問題について、**釜ヶ崎の問題を**一列に**失業者**とこう称しておりますが、この際ひとつ私は労働部長に、**普通の職安**に通つておる**日雇労働者**と**釜ヶ崎**とは、別な角度ではつきりと労働部長の頭の中で分けてほしいと思います。ということは、

片一方の方は民生委員が証明して、そうして失業手帳をもらって行つておる。片一方の方は失業者じゃないのです、一定の固定した定着した仕事をやる人ですわ、いわゆる職のない人じゃないのですね。その点をはつきりしておいてもらわんと、今後いろいろな問題が起こってくる。



たとえばあなたのやつている分室の出しておる相場が一日八百円、安定所の相場が三百円、同じ府が取り扱う労働あつせん所において賃金がどうして違うのか、こういう問題が生じてくるわけなんです。従いまして、ここをはつきりと区分けしておいてほしい。

○酒井 朋三君

宿屋の組合を調査して、労働部でバツクアツプして善導していただきたいと思います。われわれの委員の中にも、谷さんみたいに非常に宿屋に経験の深い人もおりますから、こういう人の意見も大いに取り入れてやつたら、大阪として変わったものができるのじゃないかと思います。

ただ単に立ちのきをせよというようなことを申しあげても、**現在の状態が、設備その他が悪くとも一流の旅館なみの収入が実際にある以上は**、非常にやはり問題があるわけございましてそういう人々を統合して株式会社組織の大きなホテルを作つていくとか、収入がありますので、公的な、あるいは公的に関連した融資措置等をとつて償還計画を作つてやつてもらふとか、

それから次に、実は手配師の問題、これが非常に極端に悪いやつや悪いやつやとありますがね、これはちよつと問題になるのは、けさの「大毎」に出ておりましたが、**大阪港はマヒ状態が続いて荷役作業ができない**、沖に泊つておるのが五十二隻、それからその中でもギリシヤの貨物船が四十五日泊つておる。それから一方労働者は、災害地の復旧工事で高賃金で奪われてしまい、求人連絡員が西成方面へ出かけても、賃金の値上げを要求するばかりでほとんど人が集まらない。

問題はここです。これが貿易の方に関係してくるのです。荷物を早く揚げてまた積みまして帰さにやいかん。それが大阪の港は荷役ができないということになったら、貿易業者が船に積まない、船荷証券くれませんから銀行も金を払いません、この点が大へんな問題です。そこでやはり荷役をするについては労働者がなければいかん。ところが今のあそこの西成分室では人間の市が立っている。八百円、千円、千五百円、こういう状態です。ここが問題で、大へん私は困つてくる問題やから、これをどうするかについて、労働部長さん

はどうお考えになつておるか、一ぺん聞かしてもらいたい。

○労働部長（寒川 喜一君）



その問題は実は非常に大きな問題でございます、先般運輸大臣が見えた際に、私もその席上に伺いまして、港湾の施設の問題と同時に、やはり人の問題が解決しないと問題が解決せないということをつぶさにお聞きしたわけです。

戦前には常備の労働力が60%ないし65%以上ありまして、残余のものは日雇いその他

の関係で補つておつたのが、現在は逆転しております、常備が40%弱しかない、あとは日雇いあるいは釜ヶ崎のような状態の人を使わなければどうしても困るということであるわけでございます、**抜本的にはやはり他の地区から労働力を持つてくるということが先決問題であります。**

これを機会に西日本から人を入れたり、同時に従来からの、現在もう準備が終わつておりますアパート二棟をも含めまして、先ほど申し上げましたような四百四十人分と合わせますと、ある程度の労働力が確保できるのじやないかというようなことになっておりますので、われわれも関係方面に呼びかけて、**特に沿岸漁業が最近是非常に不振でございます。従つて、山陰、長崎県の五島、そういう方面から人を迎えたいと思つております**

○酒井 朋三君

いわゆる暴力的な手配師と善良な手配師とをよく区分けして、善良な手配師、すなわち何々組というふうな身元のわかる、むちやなあら取りをしないものはやはり育てていく方が、こういうときには数をそろえていくのにいいのではないかと思います。その辺も一律一体に考えないようにお願いいたします。

○労働部長（寒川 喜一君）

今の点ですが、実は何々組という良心的におやりになつておる組もないことはございません。しかしながら、**職業安定法自体から言いますと、労務供給事業でございます、現行法から申し上げますと、アウト・ロードになつておるわけでございます。**

従いまして先般中央に対して実情に即するように法を改正してくれということを要望いたしております。たとえばマネキンあるいは理髪、そういう関係につきましてはですね、有料の職業紹介を認めておりますのに、労務供給業だけが現行法ではそれができないというような事情になつておりますので、その点は中央にもそういうことを申し入れまして、できるだけ、大阪はむつかしくて人が逃げていくというのではご趣旨に沿いかねますので、

そういう意味での善処をしてみたいと思います。』

昭和38～40年 西成労働福祉センター 登録者		
20歳未満	92	1.6%
20代	2,144	37.4%
30代	2,351	41.0%
40代	824	14.4%
50代	280	4.9%
60代以上	41	0.7%
計	5,732	100.0%
平均	33.9歳	

第一次釜ヶ崎暴動後、9月に大阪府労働部西成分室が設置され（西成区東四条 3-34）、さきの議事録にもあるように「柔軟な対応ができる」民間法人として財団法人西成労働福祉センター（東入船町 23）が設置されて、分室が廃止されたのは1年後の1962（昭和37）年10月です。西成労働福祉センターは、翌年4月に今宮住宅の西隣に新築移転しますが、多分、新築移転した後から2年間に同センターに登録した労働者の年齢分布を現したものが左表です。平均年齢は33.9歳となっています。

1962年4月には、簡宿経営者が、宿泊者の生活相談と指導するのに相当とことから、「生活指導員」として委嘱されています。

山陽特殊鋼が倒産し、山一証券が特別融資を受けた「40年不況」の年に、釜ヶ崎の労働者人口は大幅に減少します。その以前の年齢状況を示すものです。

第一次暴動後も、釜ヶ崎では幾度かの暴動が繰り返し起こっています。

第2次（1963年5月18日から6日間）

長雨で求人数が減少し、仕事にあふれる者が多く、不満が鬱積していた折から、夜間作業の求人に来た小型トラックを労働者50人位が取り囲み「オレ達にも仕事をさせろ」とわめきながら車をゆさぶったり、叩いたりした。通行人の110番通報で西成署員30人を乗せたパトカー5台が現場にかけつけ、小型トラックは離脱できたが、サイレンの音を聞いて付近から集まった労働者が600人位に膨れ上がり、取材に来た新聞社の車を取り囲んで足でけったり、通りがかりのタクシーに投石するなどの乱暴を始めた。その後、説得により一旦は四散したが、再び集し始め、通行車両やバスに投石を繰り返し、乗客が負傷する事態も生じた。離合集散を繰り返しながら6日間続いた。

第3次（1963年12月31日から2日間）

就労のため福祉センター前に集まった約1500人の労働者が、求人が少ないことから騒ぎだし、暴徒化して通りがかりのタクシーや市バス、乗用車のほかパチンコ店などにも投石し、重傷者も出た。また、ガソリンを浸した布きれを道路にまいて放火し、交通を妨害するなどの不法行為に及んだ。

第4次（1966年3月15日の1日）

立ち呑み屋で酒代の支払を巡って店員と労働者が喧嘩となり、関係者を西成警察署に同行したことから、労働者約500人が同署に押しかけ、酔って煽る一部の労働者の煽動で同署玄関に投石するなどの不法行為を行った。なお、警備のため同署に向かう途中の私服警察官が刃物で刺される事件も生じた。

第5次（1966年5月28日から3日間）

火事現場に集まった約 2500 人の群衆が「消防車が遅い」などという一部煽動者の言葉に刺激され、次第に暴徒化し、パチンコ店や食堂、民家、派出所などや通行車両、電車などに放火、投石し、警察官の拳銃を奪うなどの不法行為に及び、新聞社のカメラマンらが重傷を負った。

第 6 次 (1966 年 6 月 21 日から 3 日間)

パチンコ店での店員と労働者との喧嘩がきっかけとなり、約 1500 人が集、その後次第に暴徒化して、パチンコ店に投石し、シャッターを壊すなどして暴れ、取材のカメラマンや警察官ら九人が負傷し、南海電車も一時運行を取り止めざるをえなかった。

第 7 次 (1966 年 8 月 26 日の 1 日)

果物店で西瓜が腐っていたかどうかで労働者と店主が口論、これをきっかけに 1200 人の群衆が集り、同店の雨戸を壊し、電車を止め、パトカーなどに投石した。

第 8 次 (1967 年 6 月 2 日から 8 日間)

飲食代金が 70 円不足し、店主が客の頭をこづいたりしたことから、まわりにいた労働者がいきり立ち、店主らを殴り、ビール瓶を投げたりしたが、パトカーが駆けつけ、一旦騒ぎは収まった。しかし、その後、再び労働者が集まり始め、「店を燃やせ」などとわめきながら同店に向かって石やビール瓶を投げつけ、店の窓ガラスや店内の食器類のほとんどを壊し、店主に負傷させるなどし、騒ぎがますます広がり、約 3000 人の群衆が集まり、通行車両や商店、民家、警察官に投石するなどの不法行為を繰り返した。

1966 年 2 月には、「スラム街解消に取り組む」閣議決定があり、6 月には大阪府市警察による「愛隣地区対策三者協議会」が設置され、釜ヶ崎の呼称の代わりに「あいりん」を使用するようマスコミ各社に要請しています。

1960 年柴田記者の連載掲載から 6 年後の 1966 年 7 月、釜ヶ崎での労働司祭になろうと志していたマイケル・ギャラガーという人が、釜ヶ崎を訪れ、一月のドヤ住まい、日雇い労働の体験を「爆弾と銀杏 (講談社・1970 年)」に書き残しています。幾度かの暴動後の釜ヶ崎は、1960 年柴田記者の報告とどう変わっていたのでしょうか。



1969 年、中央に萩の茶屋駅ガードが見える

『私たちは鶴見橋通りのはずれの、往來のはげしい大通りに出ている。これは大阪の動脈ともいべき大通りのひとつであった (注: 26 号線)。この大通りを渡って、釜ヶ崎自体に入ってみても、あたりのたたずまいに大した変わりは見受けられなかった。萩の茶屋通りの店、食堂も、鶴見橋通りのそれと少しも変わっていないようであった。日本中いたるところの町中で見受けられるようなものであった。—

萩の茶屋通りは、釜ヶ崎の中心を通ってはいたものの、汚い飲み屋や食堂は見当たらなかった。もっとも、汚い飲み屋や食堂を見つけたければ、暗い、照明の悪い横町に入ればいい。すぐ近くに、安酒をあおっている労働者でたてこんだ、汚い飲み屋が数多くある。一つけくわえていうと、最低な食堂以外なら、どこでもいくぶん家庭的な雰囲気がただよっている。－

ここがよそと違う点といえば、それはただ一つ、萩の茶屋の南海線の線路に近づくと、街の雑踏がいつそう激しくなり、それもほとんど男ばかりの、普通、ボタンをかけないままのクレープシャツ、腹巻きをつけ、下駄ばき姿の労働者たちばかりになったことであった。作業シャツ、作業ズボン、それに地下足袋姿の者もたくさんいた。私の感じでは、私たちに注意を払った者は誰もいなかった。人ごみが人ごみであったから、私たちが向こうから来る姿を見たり、私たちが通り過ぎてから、ふりかえって見るなどできなかった。

萩の茶屋の南海線の下をくぐり、釜ヶ崎の中心に入った所で、今夜の宿を探そうと思った。前にも書いたように、昨年一晩「ドヤ」で過ごしたことがある。私が泊まったのは、いわゆる「個室」と称する部屋で、150円を払うと、中背の男でもまっすぐに立っていられない一畳のちっぽけな部屋を一人占めにできる部屋であった。その部屋の一方に窓が一つあるが、それを開けても、富士山のような景色は眺められず、普通エアシャフトに面していて、また一方には戸があり、夏の夜には、むんむんする蒸し暑さで、いつも明けっぱなしにしておかないとどうしようもなかった。－

そこで、萩の茶屋通りを横に折れて、目的にかないうところはないかとあたりを見まわした。私たちがいた一角は、宿賃がさまざまなドヤばかりのようであったから、よりどり見どりであった。一軒で満員だからと断られた末に、やっと南海電鉄の高架線沿いの往来に面した宿で、一人前200円ずつの二人用の部屋を借りた。－

その部屋は二畳の間で、シーツをふとんカバーに使っていたが、もう大分使い古したものらしい点は別として、手入れも充分にゆきとどいていた。－私たちが外人でも何ら興味を持たず、好奇の目で見ることもしなかった。前払いで宿泊料を払いさえすれば、それ以上何の説明もいらなかった。－

真夏のことであったから、四時頃に空は白みがかかり、起きる支度が整うときまでに、外はもう明るくなりかけていた。静まり返った宿の廊下の流しで急いで顔を洗い、歯を磨いてから、一一階におり、南海電車沿いの通りを歩いていった。一夜にはなかった静けさが、明け方になってやっとやってきた。街に人影がなかったからではない。とんでもない。線路を左にして労働市場のほうへ歩いて行くと、労務者が、物もいわず、大部分は一人で、稀に二人組で、足を引きずりながら四方八方から集まってくる姿が見えた。仕事場ではく地下足袋やら、なげなしのもち物の入った風呂敷包みや新聞をもっている者が多かった。もう、叫びわめいたり、浮かれ騒ぐ声、前夜のやかましい親睦の声などは全然消えていた。

中には婦人専用の宿もあったが、さまざまな宿泊所の立ち並んだ通りを2～3丁歩いた。驚いたことに、このいわゆるホテルやら旅館は、外部から判断すると、造りががっしりし

で魅力的で、手入れもかなりよくゆきとどいていた。わずか 150 円の料金で、わずらわされずにプライバシーが得られます、とうたった大看板を外に出している個室式の「ドヤ」もあった。

アンコを手配する組のトラックやバスが駐車している大通りまで、まだ 150 メートルほどあろうという、南海線に近いこの一角で、とうとうドヤも絶え、小さなほこりっぽい公園のそばに密集した小屋がそれにとって代わった。この小屋には家族連れの世帯が住んでいた。釜ヶ崎の住民は大半は世帯もちではなかったから、これは比較的珍しいことであった。－

左手には、南海電鉄の線路がずっと上がり勾配になっていて、私たちが四車線大通りに出たところでは、数メートルの高さに達し、その大通りと、平行して走っている環状線の両方と交差していた。－



中央奥に見える電信柱のようなものの位置から、南海線の向こうはまだ道路が拡張されていないと思える。センターが建つあたりに民家らしい屋根が見えている。ドラム缶か丸太を積んだトラックの奥、南海線の向こうに見えるドヤが宝ホテル？



私たちの前の大通りは、環状線をうしろにして、釜ヶ崎の北辺になっていた。右手を 400 メートルほど行ったところが、環状線の新今宮駅であった。（注：環状線の新今宮駅の開業は 1964 年。南海の新今宮駅は 1966 年 12 月に開業）駅のあるにぎやかな町角が、大雑把に言って、釜ヶ崎の東端になっていて、左手 400 メートル足らずのところの、前夜、鶴見橋通りを出てから渡った大通りが、西辺になっていた。

労務者は、まだ数は多くはなかったが、トラックがあとづけになっている歩道や道端に集まりはじめていた。地下道の中や歩道に、食べ物屋の屋台が店を広げはじめた。ミルク、飲み物、パンを売る店、汁、うどんなどもっと腹にたまるようなものを売る店など。こうした屋台の店主はふつう女性で、中年以上の年配であったが、ときには、もっと年の若い婦人や娘さんであることもあった。女性といえばこの人たちだけで、この女性たちがいなければ、

全く男性だけの世界になる。ー

もう時間は6時に近かった。1970年に迫った万国博の準備のせいでもあろうか、その年の大阪は、仕事口がいっぱいあったから、私が思ったほど早起きする必要はなかったようであった。私たちの乗ったトラックも、やっと半分うまったが、まわりのトラックも同じようにいっぱいにはなっていなかった。さらに、依然としてトラックやバスが入ってきていたから、100メートルほどの道端には車の入る余地はあまりなく、二重はおろか、すでに三重にもなろうとしていた。後部に防水布をかけたみすぼらしい小トラックから、ステーションワゴンの新車、大型バスまで、車種はさまざまであった。

しかし、一番驚いたのは、トラックが労務者を積んで、いざ出ようとしているぎりぎりになって、何台かのタクシーが走り出てきたことであった。タクシーが止まると、手配師が一人二人おどり出て、まだ口のきまっていない三、四人の男をつかまえはじめ、待っているタクシーに急いで押し込むのであった。

出発する時間はもう15分ほどに迫っていて、手配師たちは、車のうしろで、労務者にしきりとトラックに乗るようにさそっていた。あちこちから、手配師の倦むことなく繰り返す「さあ、行こう。さあ、行こう」という叫び声が響いた。』



参考写真は、宝でなく八千代

『宝ホテルは、ドヤとしてはかなり大きいほうであった。表は二階建てにすぎなかったが、うしろ側に六階建ての建て増しがされていた。そこがいわゆる「個室」といっているところであった。そこに行くには、広い玄関でスリッパにかえてから、左側に廊下をまわっていかなければならなかった。この狭い廊下には、両側に三畳の間が五部屋ほどあった。あとでわかったことだが、その部屋にはそれぞれ世帯もちがはいっていた。

個室という代物は、ふつう一冊の雑誌、一箱の煙草、小さいカバンといっ

たもの以外は、全く何もない殺風景なものであった。ふりの客はもち物を一切合切身から離さずにもち歩かなければならなかったのである。それとは対照的に、廊下の両側の部屋には、枕、ふとん、急須などの台所用具といった、さまざまな家庭用品がごたごたと入っていた。建て増しをした棟に入る前に、小さな調理用のガスレンジが、廊下の端の壁に備えられているのが目に入った。

建て増しの棟は六階だったが、その一、二階は同じ造りになっていて、二階の各部屋の前後に、狭いバルコニーが通っていた。それは、私が刑務所映画で目にした造りを思い出

させるものであった。

部屋から眺められるのは新今宮駅から出てすぐの、環状線の鉄のガードだったのである。頭をぶっつけないように、ちょっと頭をすくめて部屋に入ってすぐ気づいたことだが、この眺めには音響効果も加わっていたのである。一環状線の電車ばかりでなく、また別の鉄道が、それも私の部屋から数ヤードと離れていないところを通っていた。一小さな部屋一間口六尺、奥行きせいぜい六尺ちょっと、立つとつかえる天井一の戸を開け放しておいても、戸からも窓からもそよとも風は入ってこない。一「新室、お一人様用、金一六〇円也」』



二つの報告を読むと、街に変化があったように思えます。

それは、二枚の写真によって、視覚的に確認することができます。どちらの写真にも、通天閣と、クラブ化粧品の煙突・建物が見えます。

右は、上畑さんが西成労働福祉センター屋上から 1968～9 年に撮影されたもので、新今宮駅のホームが見えています。左は井上青龍さんの写真集に収められているもので 1962 年か 63 年の撮影と思われる。駅のホームは見えず、電車が写っています。青龍さんが撮影された場所は不明ですが、通天閣と煙突の間隔、屋根を見下ろす角度などから、上畑さんが撮影された場所よりも低い場所、そしてやや北西に、つまり、今のセンターのくびれたあたり、南海本線沿いからではなかろうかと推測されます。

右写真の中央やや下を左右に道路があるように見えますが、銀座通りから医療センターの角に至る東西の道路であると考えられます。左写真中央やや上、右から左あがりに道路があるように見えるのは、医療センター前の南北の道路かセンター建設でなくなった道路と考えられます。

ギャラガーさんは、1966 年に新しく建て増しされた 6 階建ての宝ホテルに泊まっていますが、写真を見比べると、その他にも中層階の簡宿が増えていることがわかります。

簡宿の増加、立て替えは行政にも大きな問題現象と考えられていたようで、設備改善資

金の融資や人口過密防止のための建設禁止区域の設定などが検討されていました。

暴動があいついだ 1966 年 9 月、大阪府・市は、愛隣地区総合対策古本計画を決定しています。それは以下のようなものでした。

『基本計画

1、就労の安定化

(1) 常用化の促進

日雇労働者の常用化を図るため健全な求人先の開拓、技能労働者の就労あっせん、**港湾労働者への切替え**、就労身元保障の代行制度の実施、就労支度金の貸付等を実施する。

(2) 就労あっせん場所の建設、移転、整備

現在の尼崎平野線に沿う路上あっせんは、常に問題が発生し、好ましくないので、地区内に有蓋の就労あっせん場所を建設、移転する。(娯楽施設、理髪室、及び浴室など厚生施設を併設)

(3) **港湾労働者用宿泊施設**の設置

港頭、愛隣地区に単身労働者用計 800 人分、世帯用 500 世帯分の宿泊施設新設方を国に要望する。

2、住宅並びに宿泊施設の建設整備

(1) **簡易宿所対策を強力に推進**する

イ 設備改善

階層式ベット、サービスエリア、衛生設備、換気設備等の居住環境設備の改善措置

ロ 設備改善資金の融資

階層式ベット、サービスエリア(浴室、洗濯場、娯楽室など)、衛生設備、換気設備等の居住環境設備の改善資金の融資措置を要望する

ハ **建設禁止区域の設定**

簡易宿所建設禁止区域を設定し、人口過密化防止対策を国に要望する

(2) 単身者用宿泊施設の建設

愛隣地区及び近辺に**単身労働者用宿泊施設 1,500 人分**の建設を国に要望する(福祉住宅)

(3) 世帯用の住宅困窮者に対する住宅建設と入居の特別あっ旋(福祉住宅)

愛隣地区及び近辺に**世帯用宿泊施設 2,000 戸**の建設を国に要望し、他地区へ退居希望世帯のうち適当と認めるものについて公営住宅入居の特別あっせんを行い、世帯更生の一助とする。

(4) 厚生施設の建設(一般労働者用)

一般労働者の厚生施設として安価な食事提供(食堂)、テレビ、ラジオ、図書、その他の娯楽設備並びに労働者の私物保管設備(ロッカー)等を行う。

3、民生福祉の充実強化

(1) 法的援護処置の充実強化

生活保護法、児童福祉法その他法的援護処置の迅速、適切な処置を行うための体制の強化

(2) 児童福祉施設の充実強化

地区内に保育所、児童館等を建設し、乳・幼児の保育と児童に健全な遊び場と憩の場を提供する

(3) 低所得者対象の内職作業所の開設

家庭経済生活安定のため、愛隣会館内に内職作業所設置する

(4) 地区福祉業務充実強化のための愛隣会館の改装

生活相談その他各種相談業務充実強化のため愛隣会館の改装整備をおこなう

4、教育施設の改善指導

不就学児童の一掃を図るため設置された愛隣小中学校は、教育施設として不十分な点が多々あるので、心身共に健全な児童育成のため運動場とプールを備えた学校を建設する

5、地区環境整備

(1) 道路、公園等の整備と不法占拠建築物の撤去促進

尼崎・平野線他主要道路の必要個所に防犯灯を整備するとともに交通安全柵を設置する

既設公園3ヶ所の整備と公園予定地区の移転対象物件の早期立退を完了し、公園を造成する

(2)都市改造事業の促進と道路整備

不法道路占拠の立退と、区画整理予定地の事業実施並びに未舗装道路の一掃を速やかに行い、地区環境の整備を図る

6、医療態勢の強化

(1)医療機関の充実

当地区の特殊性により、感染症疾患の多発、精神衛生上の問題患者（精神病者、アルコール中毒者他）、労働災害による患者等が多数を占め、一般的見地からの医療行政が困難であるばかりでなく、患者数の急増等から医療機関の充実を迅速に行う必要がある

(2)保険に加入していない者に対する特別施療

労働者約15,000人のうち社会保険加入者率は、約30%と推定され、他の70%の多くは経済的不安定並びに社会保険非加入などの理由のため診療手遅れとなり、不治、死亡に達する者が多いので、これらが救済事業として特別無料施療を行うよう国に要望する

7、治安及び救急態勢の強化

当地区における各種暴動発生の因をなす不良労働者及び暗手配師その他反社会的

行動を行う者の強力な取締り、並びに接客業者に対する適切な各種の指導を強力に行うと共に、非常の場合に於ける緊急態勢の推進を図る

8、明るい町づくり運動の推進

地区の各種団体、社会事業施設、並びに関係諸機関（区役所、警察、保健所など）に地元労働者代表をも加えた「愛隣地区環境浄化対策協議会」（仮称）を設置し、地区の浄化実践活動を推進する』（「あいりん地区に於けるスラム対策と現状の問題点 1973年3月、細見 正、私家版による）』

さまざまに計画が立てられています。実現したものもあり、しなかったものもあります。手はつけられたものの、規模の点で計画に及ばなかったものもあります。

簡宿の立地規制や単身労働者用宿泊施設 1,500 人分の建設、世帯用宿泊施設 2,000 戸の建設が現実のものとなっていれば、今の街とはずいぶんと変わったものとなっていたことでしょう。

多数の人が利用する施設は、その設置によって、周辺の町の様子が変化します。たとえば、柴田記者が注目した“職安横丁”ですが、職安がもともとそこにあったわけではありません。職安が建つ以前になにかあったのかは、確認していませんが、「阿倍野公共職業安定所西成労働出張所」が甲岸町から東萩町に新築移転してきたのは 1950 年のことです。

ちなみに、「阿倍野公共職業安定所西成労働出張所」は、1966 年 4 月に「大阪港労働公共職業安定所西成出張所」（港湾労働法施行により）と名称変更され、1970 年 3 月に廃所されています。同年 4 月からは、あらたに発足した「あいりん労働公共職業安定所」の仮庁舎として使用され、「あいりん労働公共職業安定所」が同年 10 月に「愛隣総合センター」に移転した後は「あいりん労働公共職業安定所分庁舎」となりました。現在、釜ヶ崎支援機構お仕事支援部が使用している建物は、建設当時そのままです。

「阿倍野公共職業安定所西成労働出張所」は、1948 年 6 月発足ですが、その場所が甲岸町であったかどうかは、確認していません。甲岸町 12 番地には戦前、大阪市徳風国民学校（旧・大阪市立徳風勤労学校）があり、1945 年 6 月 15 日空襲で、講堂を除いて焼失してい



1953（昭和 28）年職安正門前付近から南海線方面

ます。生徒約 150 人は、前年 9 月、和歌山県海草郡直川村に集団疎開していました。大阪市徳風国民学校そのものは、1946 年 3 月、萩之茶屋小学校に合併、廃校となりますが、講堂は一時進駐軍労務紹介所となり、その後戦災者の住居となっていた、と細見さんは記しています。

いずれにしても、「阿倍野公共職業安定所西成労働出張所」が東

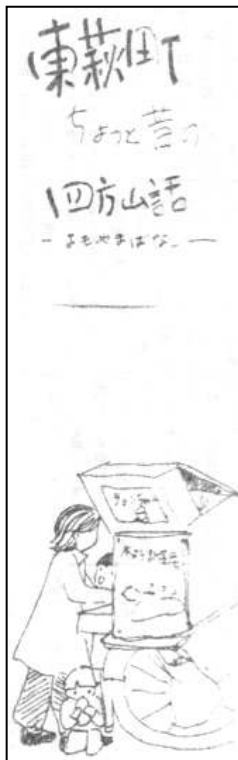


萩町に来たのは1950年であり、柴田さんの見た通称西成職安とその周辺の様子は、その10年後のことであったこととなります。前ページ写真は、柴田さんの書いた職安前のメインストリートの職安開所3年後のものです。柴田さんが見た時点からいけば、7年前ということになります。記事から受ける印象とずいぶん違うように思われますが、どうでしょうか。

左写真は、小杉邦夫さんの写真集に所収されているものですが、前ページ写真が道の右端から撮影しているのに対して、この写真は道の左端から撮影していますが、立ち位置は職安正門前付近で同じと思われます。

前ページ写真の20数年後、1975年前後の撮影と思われる。撮影時間が朝と昼の違いがありそうですが、柴田さんの記事によれば、1960年には、登録者約5,000人、毎日集まるのは4,000人でしたが、1975年頃には登録者約1,500人、毎日集まるのは1,000人以内の状況であったと思われます。

町にあらたにできる、多数の人が利用する施設、その担う機能の盛衰によって町並みも影響を受けざるを得ません。

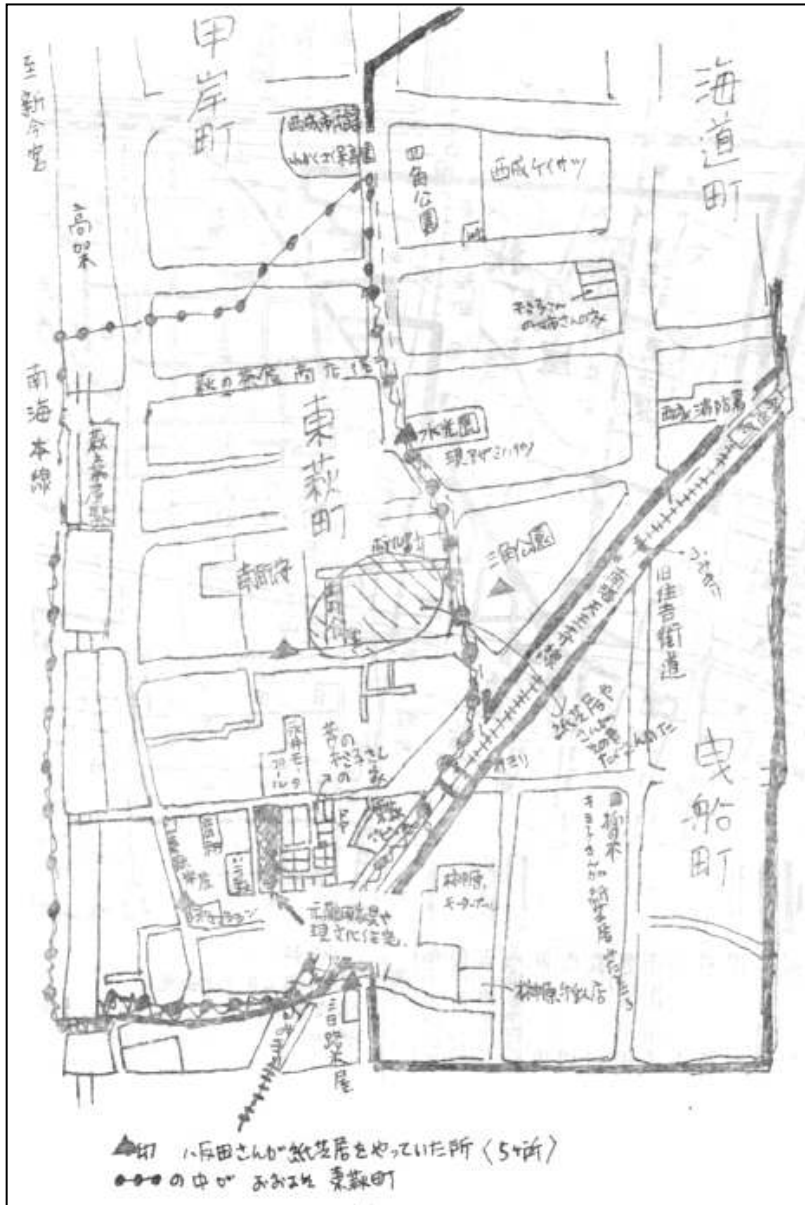


柴田さんの書く以前、書かなかった職安付近の別の世界を、紹介します。町の変化は、住む人の生活の変化でもあったことが、多少伺えるものとして、「東萩町 ちよつと昔の四方山話」(労務者渡世 37号—1983年5月)を紹介します。

『松村食堂の死んだおじいちゃんが紙芝居屋だった、というのを聞いたのが、近所のおばさんだったか、塩崎さん(三邑会)だったか、どちらが先か忘れてしまった。

—富士ホテルの裏手に紙芝居の絵をかく人や紙芝居屋さんがいっぱいおったで。戦争、終わってからや。(近所のおばさん)

—松村食堂のおじいちゃんは、最初、僕の所に来て、港区の市岡で紙芝居やりはじめたんや。戦前もや。でも、ジェーン台風(1950年9月)で家がメチャメチャになって、又、西成に戻ってきて、今の松村食堂のあるあたりに住みだした。その頃、三邑会の支部があそこにあったからな。それから、紙芝居じゃなくて、商売したいゆうて、食堂しながら少しずつ金を返して、あの土地を譲りうけて今の松村食堂にしたんや。(塩崎さん)



南職安が 1950 年 5 月に今の場所（萩之茶屋 2 丁目）にできた。それから、しばらくして食堂をはじめたらしい。

塩崎さんは西成区花園南で、三邑会という紙芝居の絵元を続けている。1948 年頃、今の松村食堂のある通りに三邑会の支部があった。紙芝居が一番盛んだった頃の話だ。支部は、紙芝居を絵元から借り、菓子の仕入れもまとめてする。20 人ほどの紙芝居屋が支部から出ていたという。

—あとう。幾つぐらいの紙芝居屋さんが多かったんですか？

—幾つぐらい、と言っても。たくさん子どもがいた人もいるし……。とにかく、みんな子どもは小さかった。あんたらの子

ども（4～5 歳）ぐらいや。（塩崎さん）

支部をやりながら、紙芝居用の酢昆布を作る昆布屋を兼業にしていたおじさんもいた。そのおじさんにも 5～6 人の子どもがいたという。

—乳母車に舞台と自分の子どもをのせてまわっている女の紙芝居屋さんもいてたよ。（塩崎の奥さん）

塩崎さんの家でも飴を作っていた。

—お正月になったら、背中に刀みたいなアメさして、紙芝居屋さん、出て行ってんで。お金で売るんやのうて、懸賞にあたらあげるアメや。（塩崎の奥さん）

佐々木小次郎みたいな紙芝居屋のオッチャンが目浮かぶ。棒飴、アメの型抜き（型どおり抜くと何かもらえる）などもつくった。そのころ紙芝居用の菓子も一緒に売っている

絵元は珍しかったらしい。

八反田（はったんだ）さん—僕は、戦後からずっとこの辺り（釜ヶ崎）をまわってるよ、という紙芝居屋さん。

一昔はたくさん紙芝居屋がいた。朝の9時半位から、夜も9時すぎまでやっていた。必死だったよ。一日10ヶ所はまわったな。

戦後、紙芝居が一番盛んだった頃、西成区だけで、10軒余りの紙芝居の貸元があったという。一ヶ所にいれかわり、たちかわり10人の紙芝居屋がやってきた、ということもまんざら嘘ではない。

大和マンション、水光園前（現アザミハイツ）、三角公園、南職安南入口、そして踏切を越えた三日路米穀店、飛田界限、すべてを聞いたわけではないが、八反田さんがまわっていた場所だ。つばのある帽子をかぶってめがねをかけた小柄なおじさんが、拍子木をたたきながら、急ぎ足で歩いているのを釜の中でみかけた人は多いだろう。八反田さんは今も元気に阿倍野の北の方、そして源ヶ橋あたりをまわっている。

保育所の帰り、二人の娘を自転車にのせて、木よう紙芝居を見にきてくれるキミ子さんが、「私、小さい時、東萩のベビーセンターの踏切越えたところで、5円か10円もって紙芝居、よう見たよ。」という。

松村食堂のある南職安の一つ南、東萩ベビーセンターから西へ東萩米穀店までの道。小学生6年生まで、キミ子さんはここに住んでいた。炭屋の娘だった。（今、私の住む2階建文化住宅もこの通りにある）

キミ子さんが、私の家へはじめてやってきた時、一前のアパートは古いね。私、子どもの時、大工さんが建てるの見てたよ。壁、ぬってるのも見てた。ここ藤田家具っていう家具屋さんがあったんよ。大きな黒い犬がいて、背中にのっかって、よう遊んだ。

私の家の東の窓を開けると平屋のトタン屋根が並ぶ。—あすこの家のオバちゃんたち、アメを紙につつむ内職やテレビの部品をつくる内職、みんなやってたよ。

永井モータープールも元アメヤさん。今は、育和とってゲーム機を作っている作業所もアメヤだった。えびせんを作っている家があった。今みたいにアスファルトの道と違う、土やったから焚き火で焼イモ、やいた。アメヤで、紙の上にオブラートを敷き、アメつつむのを手伝って、アメもらった。榊原の牛乳屋のいちじく、取って食べた。と、—食べる—ことからの記憶が次々にでてくるのだ。でも、うまかったというのは聞かなくてもわかる。

テレビが世の中に出回りはじめた頃、キミ子さんは、警察署の並びのお姉さんの家に、よくテレビを見に行った。見ていると、どうしても夜遅くなる。もう帰る時間になり、泊まろうか、帰ろうか、どうしよう。と思い迷った揚句、一気に走って帰ったという。—今みたいに、明るくなかった。暗かったんよ。

銀座通りから、萩之茶屋商店街を横切り、海道消防署の前を南西に、南海天王寺線の線路脇、右に三角公園、そして、キミ子さんの家まで。

中学生になってキミ子さんは、銀座通りのお姉さんの家に移った。

1961年、釜ヶ崎第一次暴動が起こった。夜になると、大勢の人が集まり、警察署めがけて石を投げる。車が押し倒され、炎上する。お姉さんの家は、警察署の並び南へ道一つへだてた角から3軒目の家だから、真っ只中だ。

—こわかったやろ。どこでみてたん？

—二階の窓。雨戸はきっちりしめてあるんやけど、それを細くあけて見てた。

—何日か続いたやろ。夜になったら、どっかへ避難するとかせえへんかったん？

—せえへんよ。

—でも、こわいやろ。石投げたり、車が燃えたりして。よう見てたな。

—一瞬、ことばが途切れて、キミ子さんがじっと私を見た。

—……。なんていうかな。

—こわいもんみたさか？

—うん。そうや、それやな。それに警察めがけて石投げるからな。うちの家に石投げたり、誰もせえへんかったで。

暴動を知らない私の勝手な思い込みが軽く流されるように思えた。

夜、どこからか石を集めてきて売る人もいたという。

それから、キミ子さんはしばらく西成を離れ、5年ほどして、お姉さんのうどん屋を手伝うために戻ってきた。

—しばらく離れていたら、萩之茶屋商店街、通ったりするの、ちょっとこわいんやね。でも、生活しだすと、そんな気持ち、なくなるんやね。やっぱり、住まなあかんわ。

今、三角公園西のかま一番でキミ子さんは働いている。』



年前後の職安通りの様子。

写真左の建物が職安、その右が松村食堂。



職安前の木造アパート東萩荘は建て変わっている。砂守さんの写真集所収。1980

職安の横で、多分、小さな露店食堂からはじめて写真に見られる大きな食堂にまで仕上げた人もいれば、紙芝居の衰退なんのそのと、一貫して紙芝居を続ける人もいます。職安はやがて、港湾の仕事がなくなり、失対事業がなくなり、閉鎖され、職安前の繁栄は終わり、松村食堂もなくなりました。

人の人生は個々人の努力、周囲の状況に応じて生活を変える力によってさまざまなパターンが生まれます。

敗戦後、失業の時代に炭鉱へ、港湾労働へ、その流れに入った人たちも、職安横町を多数通り過ぎたことでしょう。

1963～65年の西成労働福祉センター登録労働者の平均年齢は33.9歳でした。それから45年、単純に言えば、それらの人の現在の平均年齢は78.9歳ということになります。

昭和45～51年あいりん職安登録者		
20歳未満	8	0.0%
20代	4,014	12.8%
30代	11,762	37.6%
40代	9,968	31.9%
50代	4,148	13.3%
60代以上	1,377	4.4%
計	31,277	100.0%
平均	40.7歳	

1970～76年のあいりん職安登録者の平均年齢は40.7歳とされています。対象が違うというような気もしますが、多少に人間の入れ替わり、釜ヶ崎への新規参入があったとしても、順調な加齢による平均年齢の上昇と見えなくもありません。

昭和36年大阪府商工労働常任委員会会議録に見たのは、簡宿の育成であり、法的にはアウトロードの労働供給業者の是認、保護でした。

釜ヶ崎に住み、働く労働者の処遇は、その日に役立つ労働力としてのみ、評価され、それにはずれるものは、元の位置に押し戻される援助であったように思われます。

1961年の基本計画は、東萩町への職安登場が周辺に生きる人たちに与えた影響のように、釜ヶ崎全体に大きな影響を与えたに違いありません。それは、釜ヶ崎に住み、働く労働者の生活にも大きな影響をあたえるものであったし、現在の状況を導き出したものであるともいえるでしょう。

利用写真元紹介

*Hysteric One 井上青龍 2001年2月 ヒステリックグラマー

*泰平の谷間の生と死 小杉邦夫 1978年9月 プレイガイドジャーナル社

*カマ・ティダ大阪西成 砂守勝巳 1989年1月 アイピーシー

*1984.12.富田一栄編「大阪における愛徳姉妹会の社会福祉事業50年史」。社会福祉法人愛徳姉妹会